

# 視点

## 万引き対策

店内で業務中の保安警備員が万引き犯から暴行を受ける事件が相次いでいる。犯行現場はいずれもスーパーで、3月に千葉県野田市、4月には愛知県蒲郡市と長野市で、犯罪を制止しようとした際に犯人に殴られるなどの被害に遭った。

通称「万引きGメン」と呼ばれる保安警備員は、犯人と対峙するための高度な技術や十分な法知識の習得が必要だ。それらが万全でも、逃走を図る犯人から暴力を受けるリスクがある。

保安警備業務には警備業法で定める検定資格制度がない。社内教育を受け現場で捕捉経験を重ねることですスキルを磨いていく。ある保安警備員は「現場で初めて万引き行為を発見したときは、声をか

けて『盗んでいません』と返されたらどうしようと思ひ、足がすくみました」と話していた。

全国万引犯罪防止機構によると、万引き犯の確保は警備員が78・1%、従業員は11・7%と警備員が圧倒的に多い。店舗が安定した収益を確保し、来店客は安心して買物を楽しむため、警備業に寄せられる期待は大きい。

## 学ぼう「科学保安警備」

日本人による万引きが増加傾向にある。さらにインターネット上のフリーマーケットを利用した盗品の転売や、下見・見張り・商品持ち去り・逃走用車両の運転など役割を分担する組織的窃盗や、導入が進むセルフレジの悪用など、犯罪が多様化・複雑化している。

総会を開いた。稲本義範会長は「万引き犯罪は2022年、全犯罪認知件数の13・7%を占めた」と報告。刑法犯認知件数は2002年をピークに減少傾向にあるが、万引きの認知件数は減っていないため、全犯罪に占める万引き認知件数の比率は年々上昇している。万引きはかつて「青少年の健全な育成を阻害する社会問題」といわれていた。近年では高齢者や外

国による万引きが増加傾向にある。また顔認証システムの運用を理解していれば警備員が変わっても同じ効果を出すことができる。一度登録すれば長期間が経過してあっても正確な対応をとることができる。

最近顔認証技術を活用した対策が進められており、JEASは21年に「科学保安委員会」を設置した。科学保安とは、JEASが「顔認証システム」に、万引き常習者や転売目的、大量・高額盗難などの犯人の画像を登録。店舗出入口に設置した監視カメラで検知した際に、警備員や従業員のスマートフォンに通知することで情報共有する取り組みだ。科学保安警備のメリットとして、多くの目で警戒することで犯罪を未然に防止できることが挙げられる。また顔認証システムの運用を理解していれば警備員が変わっても同じ効果を出すことができる。一度登録すれば長期間が経過してあっても正確な対応をとることができる。

科学保安委員会は毎秋「科学保安講習会」を開催している。顔認証システムをフル活用できる警備員の育成が目的で、今年で3回目を数える。委員会の日本保安・青柳秀夫リーダーは総会で「今年の講習会は11月に都内会場とオンラインで予定している」と発表。全国警備業協会が発行する教本「保安警備業務の手引き」を使用して基礎知識を確認する「事前講習」を10月に行うことも報告した。

保安警備は今後、警備の精度と効率を高め警備員の安全を守るため、個人情報保護など専門家のアドバイスを受けながら「人的警備と先進技術の連携」が進む。それを機に、長年続く社会問題である万引き犯罪の認知件数減少を加速させたい。